

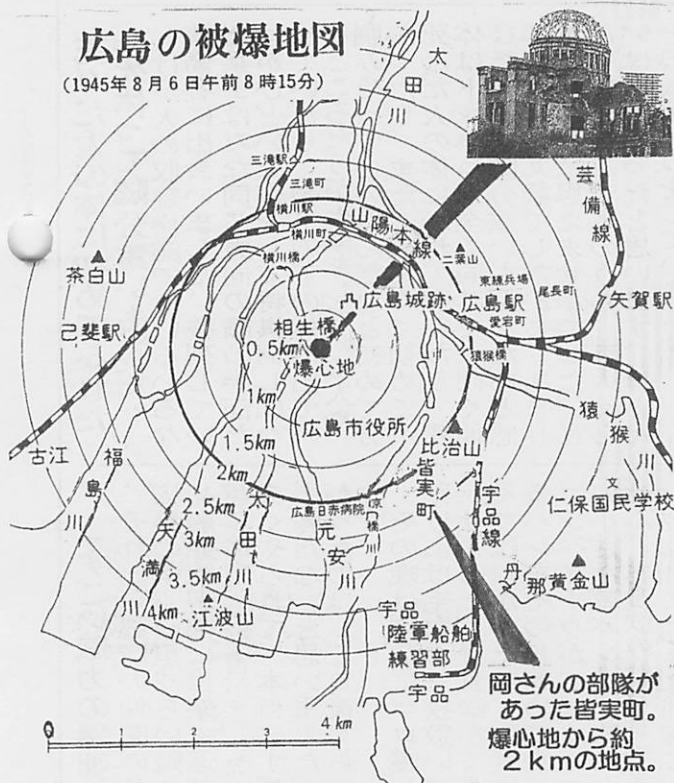
1945. 8. 6
ヒロシマ

ヒロシマ



●アメリカは1942年夏から原子爆弾製造計画の「マンハッタン計画」を極秘裏に開始。そして1945年7月に3個の原爆が完成。7月16日早朝の5時30分、アメリカ西部のニューメキシコ州アラモゴール砂漠で実験に成功する。＜左写真＞●米国政府と軍部は「日本軍国主義にとどめを刺し、連合国側、特にアメリカ青年の犠牲を極力少なくする」を口実に、ソ連への牽制のため、西日本最大の軍事都市広島に8月6日、原爆を投下する。●当初の原爆投下候補都市は、1小倉、2広島、3新潟、4京都。特に京都は7月まで有力な目標都市でした。

(1945年8月6日午前8時15分)



岡さんの部隊が
あった皆実町。
爆心地から約
2 kmの地点。

広島の**比治山**の**部隊**で**被爆**
 私は大正一五年二月、南相馬市鹿島
 区に生まれ、今年八五歳です。一九歳の
 時、広島の軍隊で被爆しました。
 昭和一八年に軍需省に入り、大阪の近
 畿管理部で約半年間つとめました。その
 後、昭和二〇年四月二四日ごろ、広島の
 船舶通信補充部隊第一六七〇部隊に現
 役召集され入隊しました。部隊は広島市
 の比治山の南の皆実町というところにあ
 って、爆心地から約二キロメートルの地
 点です。大変大きな部隊で、全部で二千
 人ぐらいの兵隊がいました。

戦後に分かったことですが、新地町の飯土井鶴吉さん（故人）も同じ部隊にいて、悲惨な被爆体験をしています。四月に入隊し、私は二等兵でしたが通信の幹部候補生で、毎日モールス信号の訓練に励んでいました。五月ごろからその部隊のなかの「力隊」というところに入りました。

呉が激しい空襲にあうのを目撃

原爆投下の八月六日の三日ぐらい前から、夜間の空襲が激しくなり、広島は空襲されなかったのですが、広島のは近くの呉あたりが随分やられていたよ

私戦争体験 (39)



十九歳、広島軍隊で被爆
「兵隊さん、水をください」

南相馬市鹿島区大内岡実

あうのを目撃
の三日ぐらい前
しくなり、広島
ですが、広島の
やられていたよ
うです。私の部
隊から呉がやら
れるのがよく見
えまして。昼も
アメリカ機が降
下しては上昇す
るのがはつきり
分かりました。
そして私たち
の部隊でも比治
山の上の方に防
空壕を掘って、
そこに機材や衣
類や食糧を保管
する作業を行
いました。夜間交
替で作業は続け
られたので、兵
隊はみな疲れ

ていました。食糧事情も大変悪く、米も一汁一菜で、ごはんなんかは飯盒のフタにさらっと一膳で、それを「二〇分かけて食べよ」と言われていました。

でも私たちは一九歳で食べ盛りですから、二、三分であつたという間に終わつてしまふのです。すると、「初年兵箸を左手に持て」と言われ、無理にゆつくり食べさせられました。

八月六日、原爆投下の時
兵舎で仮眠していたが

八月六日の原爆投下の日、いつものように五時の起床、朝食は七時でした。ところが、毎日防空壕掘りの作業でみんな疲れきっていたので、私たちの部隊は午前中就寝休憩となり、各自宿舎で自由に眠るなり休んでよいことになっていました。

宿舎は二階建てで一部屋に七五人ぐらいいました。ベツトは狭く、幅は五〇センチぐらいしかありません。本当は二段ベツトなんですが、その間にもう一段ベツトが入っていて、それを「二段ギソウ」とよんでいました。つまり兵隊を二倍収容できるわけです。とにかく私はその時、その二階の北の窓から二番目のベツトで眠っていました。

一瞬にして兵舎は破壊され

午前八時一〇分過ぎだったのか、時間ばかりません。飛行機が飛んできたのが、うつらうつら分かつていたよくな気がします。空襲警報は鳴らなかつたのか、だれも避難はしていません。

(裏面につづく)



はんごう

部隊の食事はいつも一汁一菜で、ごはんなんかは飯盒のフタにさらっと一膳で、それを「二〇分かけて食べよ」と言われていました。

でも私たちは一九歳で食べ盛りですから、二、三分であつたという間に終わつてしまふのです。すると、「初年兵箸を左手に持て」と言われ、無理にゆつくり食べさせられました。

八月六日、原爆投下の時
兵舎で仮眠していたが

八月六日の原爆投下の日、いつものように五時の起床、朝食は七時でした。ところが、毎日防空壕掘りの作業でみんな疲れきっていたので、私たちの部隊は午前中就寝休憩となり、各自宿舎で自由に眠るなり休んでよいことになっていました。

宿舎は二階建てで一部屋に七五人ぐらいいました。ベツトは狭く、幅は五〇センチぐらいしかありません。本当は二段ベツトなんですが、その間にもう一段ベツトが入っていて、それを「二段ギソウ」とよんでいました。つまり兵隊を二倍収容できるわけです。とにかく私はその時、その二階の北の窓から二番目のベツトで眠っていました。

一瞬にして兵舎は破壊され

午前八時一〇分過ぎだったのか、時間ばかりません。飛行機が飛んできたのが、うつらうつら分かつていたよくな気がします。空襲警報は鳴らなかつたのか、だれも避難はしていません。

(裏面につづく)



(表のページより)

ピカッと朝の太陽の光とはまた別に、それ以上の明るい、黄色っぽいような光を感じました。と同時にドーンという大きな音がして、音とともに一瞬にして兵舎は破壊されました。

ベットの間に落ちて助かる

棟が落ちてきて瓦がガラガラと崩れてきました。私はベットの二段ギンウの下にちようどうまくぐつてしまい、それで助かりました。胸が圧迫されて苦しかったことを覚えています。瓦と同時に壁土も落ちてきて、もう土けむりでなにも見えません。枕元にきちんと置いたはずの服も靴も帽子も見当たりません。下着のままはだしで外に出てみると、町のあちこちから火事が発生していました。

大きな「きのこ雲」を見上げた

比治山の上の防空壕の前に集まり、茫然として山のところに背をもたれ空を見上げていました。するとそこにモ



原爆投下5分後の広島

それが「きのこ雲」でした。そのうち、「元氣な者は出てこい」と言われ、靴と服をもらって内務班にもどりました。部隊内のけが人の収容にあたりました。私と同室での即死者は、茨城県の山田という一人だけでした。

死んだ人の体に初めてふれた “死体つて随分重いもんだ”

けが人の収容作業ではいろいろな負傷者に出会いました。整列していた兵士はみな同じ方向の顔の半面だけがひどい火傷をして将棋倒しになっていた。帽子の下の外に出ているところだけが火傷をしている人、脳みそつて白いもんだと初めて分かった。また、生まれて初めて死んだ人の体にもふれて運んだり。死体はドンコと全く同じで、硬く伸びたままで随分重いもんだなあと感じたり。一九歳で死んだから、あまり気持良いとは思えませんでした。私たちの部隊二千人のうち、百人ぐらいは亡くなったと思います。ほとんどの人がケガをしていました。

市民の負傷者もやってきて 「兵隊さん助けて、水を」と

二、三時間後でしょうか、広島町の一般の負傷者たちが、私たちの部隊に助けを求めてたくさんやって来ました。「兵隊さん助けて」「水をください」と言つて。あの悲しい、哀れな声は全くいいもんじゃありませんし、今でも忘れられません。水道はもう止まっていたから、古井戸から水をくんで子供にも飲ませたりしました。火傷のひどい人は、皮がむけてしまつて、まるでボロのシャツを着ているようでした。それにゴミなんかがたくさんついて、本当に残酷なものでした。飲ませた水だつて、そのあんなにきれいな水じゃありませんが、仕方ありませんでした。



「すごい威力の爆弾だな」

それから部隊の仲間の負傷兵を、広島市の南、一里ぐらゐ離れた宇品船舶練習部に担架で運びました。運ぶ途中、「被害がこんなに遠くまで広がられて、本当にすごい威力の爆弾だな」と思いました。原爆とわかつたのは、三日後ぐらゐだと思えます。

その晩は宇品にゴロ寝し、けが人だけには毛布を一枚敷いて並べて寝かせました。昼食なんて食べるどころではなかったし、夜食に携行食の乾パンをその日初めて食べました。コンペイトウが二つくつついた、硬い小さな乾パンで、味なんかありません。水を飲み飲み食べました。

翌七日にはまた部隊にもどつて兵舎の後片付けの作業をしました。

八月一五日の終戦の放送は、無線機を通して聞きました。その二、三日前ごろから、どうも下士官の様子がおかしう、うわさ話でみんな戦争はやめるんじゃないか、なんて言っていました。部隊が解散になったのは九月二〇日でした。

姉たちが広島まで迎えに来る

ところが私の鹿島の生家では、終戦後一ヶ月以上も経つのに、私の消息がつかめず心配して、姉といこの三人が、私を迎えに広島までやって来ました。交通事情も悪く、切符も買えず、瀬戸内海を経由して苦労して、九月二三日の夕方、広島に着きました。私だつて連絡のしようがありませんでした。そして、四人で広島市宇品から船で尾道へ。尾道から鹿島までは汽車で帰りました。

幸い、体は異常なしで

本当にこんな原爆や戦争中のことなんか、夢のようです。戦友会などでこれまで五回広島を訪ねています。幸い私は爆心地から二キロメートルの地点で被爆していますが、一年ぐらゐは体はだるかったです。でも幸いその後、何ら異常はありません。健康で酪農に従事し、子供は三人、孫七人、曾孫一人になりました。

今だからこそ被爆の話もできますが、昭和二十七年に結婚した時も被爆のことはふせていました。それだけ不安も偏見もありました。

原爆手帳は雑誌「家の光」で読んだ、県に申請しますが却下され、同じく広島市の宇品の軍隊にいた鹿島の鳥崎のNさん(故人)の証言でようやく交付されました。

(※編者注・Nさんは宇品で被爆。八月下旬に麻酔なしで盲腸手術を受け、命からがら鳥崎の自宅に生還されました。)

日本の原爆製造計画は失敗

原爆なんて本当にひどいもんです。でも私が鹿島区の真野小学校で代用教員をしていた昭和十八、十九年の元旦の『日日新聞』に、「マツチ箱ぐらゐの大きさの武器で大艦隊を撃滅できる弾薬」というような、今考えればと原子爆弾のことだと思ふのです。が、そんな記事があったことを覚えていますが、日本でも原爆を研究していたが、製造過程で爆発し失敗した、ということもあつたそうです。国と国がお金の対立で争いや戦争になるのですが、戦争だつて決してやるべきではないと思います。あんな悲惨なことはたくさんです。

○この被爆体験は、1983年5月23日に伺ったお話(1983年発行の被爆体験談集『私も証言する』に収録)と、今年6月22日訪問時のお話をまとめたものです。○岡さんは今年85歳、お元気で農作業中でしたが、訪問に快く応じてくださいました。○現在、広島市の比治山は標高70mの展望台のある「比治山公園」になり、宇品の通信隊跡地は6月22日暴走事件が起きた「マツダ宇品工場」になっています。